

たシベリア抑留労働生活の本が展示され、館内に資料が多く、復員船英彦丸の写真等、何を見ても思い出ばかり。二、三度館内を歩き回った。帰国第一歩を踏んだ棧橋は復元され、舞鶴港を見下ろす見晴らし台もできていた。

バイカル湖畔にて

神奈川県 及川勝郎

私は、十八歳で特別幹部候補生の第一期生として志願しました。この頃は戦争一色で、出征兵士を送る毎日でした。隣の家も、また次の家でも愛国婦人会の人々が旗を持って駅で見送るのでした。兵隊に行かないと何となく肩身の狭い思いでした。浜松の飛行隊に入隊して三カ月の教育を受けて、満州に転属となりました。戦争の悲惨さも知らず、ただ「君に忠、親に孝」のみでした。満州に行っても、関東軍百万といわれた兵隊も半分以上は南方に行き、また私の勤務であ

る飛行機もほとんどなく、地上勤務となり国境警備の毎日でした。

二十年八月十五日の終戦となるや、ソ連軍は怒涛の如く侵入し、何の交戦もなく武装解除となりました。ソ連国はこの頃、ドイツに散々と苦しめられたため物資や食料はひどく不足していたので、私達はもちろん、民間の人々からもありとあらゆる物、扇子、箸までも略奪していきました。部隊の近くにいた満州開拓団の人々は我々以上に不安の日々でした。ソ連兵による物資の略奪や婦女暴行事件という悲しい毎日であり、そのために女の人は坊主頭にして昼間は身を隠し、夜になって日本に帰る行動をとっていました。大変な苦勞をして日本に帰ったと後になって知りました。

ところで、私達は何一つ持たず貨車に乗せられました。この貨車は改造され、上中下の三段式となっていて、立つことができないので横になっているだけでした。「行く先は日本」と言って、多くの兵隊さんに乗せて北に向かって動き出しました。ソ連軍の命令で各駅停車でしたので、その度毎に貨車より降りて、身体

を動かしたりまた用を足すのです。ちょっとでも線路より離れるとソ連兵は空に向かって発砲するので、大便是恥をしますので貨車の下に入り用を足しました。病人は後方の貨車に移され、身動きもできない狭い場所と長旅でもって、悪夢のような列車の旅でした。

数日間貨車に揺られ、どうやら終点のソ連国境に着きました。十二月でしたので寒さも厳しく、黒龍江が凍結していたので歩いて渡りました。ここで初めて、日本には帰れず、これからどこに行くのか、どうなるのかと、不安といらだちが起ころのでした。ソ連兵は前後左右に銃を持って「ダワイ、ダワイ（早く歩け）」と責めました。まさしく長蛇の如くで、列が乱れるとまたソ連兵がやってくるのでした。寒さと疲労で落伍する人、病気の人は我々の知るよしもなく、ただただ前に前にと歩くのみでした。この時の悔しさは忘れません。昼も夜も歩き続けました。食べものと言ふと、満州より略奪した家畜の餌である大豆カスでした。大きい物でしたので碎いて後の人に渡し、歩きながらの食事でした。これは食事とは言えませんでし

た。二日もすると全員が下痢の状態となり、歩くのも大変で、病気の人も出ましたが、少しでも立ち止まるとソ連兵が来て「ダワイ、ダワイ」と銃口を向けるのでした。

ふらふらでたどりついた所はバイカル湖畔でした。すぐに船に乗せられ、甲板ではなく船底に皆が横になるだけでした。船酔いすること二日間、上陸した所は湖畔の奥深い所にある囚人収容所でした。建物は高い塀に囲まれ、四隅には監視楼が一段と高く立って、逃亡するといつでも発砲するぞと銃口を我々に向けていました。

窓一つないうす暗い部屋、そして電灯もなく、出入口は一つ、あるのはベチカ一個、狭い通路の両側は寝台。寝台といつても、丸太を半分に切り、木の皮をつけたままで虫もいます。後ではシラミも出ました。全くの暗闇では何もできないので、裏山に行つて松ヤニを採つてきて一夜の灯としました。夕食も灯が消えないうちにと急いで分配するのでした。飯盒の蓋一杯のジャガイモスープも、うす暗いため芋のないスープの

人もいました。それに初めて食べるロシアの黒パン。なんと一切れのパンの中に穀殻が数十個入っているの
で、つまみ取って食べました。食べないと死んでしま
います。胃に刺さる思いでした。他に食べる物はあり
ません。一切れのパンと中身のないスープでは腹がへ
って眠れません。やがて松ヤニの灯も乏しくなり、だ
んだんと話す元気もなくなり眠るのでした。朝起きて
見ると、皆の顔は松ヤニの煙で真っ黒でした。外に出
て雪でもって顔を洗いました。支給された一枚の毛布
と自分達の衣類も真っ黒でした。

この冬は例年より寒いとあって、なんと零下四十度
でした。部屋の中でも眉毛が白くなり、濡らしたタオ
ルがピンと立つのです。トイレに行っても、大便秘し
終わらないうちにピラミッド型となり、後からの人の
ために鉄棒で砕きます。すると顔に固まりが跳ね返っ
てくるのですが、別に臭気もないので、ソリに積んで
裏の林の中に捨てる毎日でした。

さあ仕事です。防寒服を身につけ、足に布をぐるぐ
ると巻き付けて防寒長靴を履き、グローブのような手

袋を肩にし出発です。雪が深くて腰までつかるので、
一列になってゆっくりと前の人の足跡に踏み入れて
「右、左」と声を出して歩くこと二時間、やっとの思
いで目的地に着きました。周囲は松の大木で空をも覆
い隠すような森林地帯でうす暗く、寂しさを感じまし
た。この大木を切り倒すという伐採の仕事でした。初
めて見る二人引き鋸で、直径一メートル以上もあるこ
の大木、なかなか二人の呼吸が合わず、息のみがハア
ハアと出るありさまで、やっと一時間かかって一本の
大木を切り倒し、枝を払って仕事は終わりでした。

婦りは、朝米た雪道を、長靴の中に雪を入れないよ
うに足を上げてゆっくりゆっくりと歩き収容所に着き
ました。北国の日暮れは早く、周囲は真っ暗闇となり
ました。帰って来たら夕食を食べて寝る。また朝がく
る。何の楽しみもなく山に行くの繰り返し毎日です
た。朝起きて見ると、寒さと栄養失調で毎日一人、二
人と死んでいくのです。埋葬するといっても地面は
硬くて掘れず、雪を一メートルほど掘ってその中に入
れ、墓標もなく森の中に捨てられるのです。明日は

我が身かもしれない悲しい毎日でした。

重労働の伐採も終わりとなる頃に、ちょっとした不注意でもって自分の切った木の下敷きとなり一週間休みましたが、ソ連の医者には「打撲で大したことはないからラポータ、ラポータ（働け働け）」と言われ、仕事に戻りました。しかし、現在でも痛みを感じます。

六月になり、湖の氷も溶けて遅い春がやって来ました。なんとなく皆の顔も明るくなり元気も出てきました。伐採の帰りには、道端にやっと生えた草花を採り、茹でて食べました。何としても私達は青い物が食べなかったのです。春となると伐採の仕事も一段落となりました。ソ連国より「ダモイ（帰国）」と言われ、みんな飛び上がって喜びました。

お互いに手を取り合い「良かったねー」と交わすことばとともに涙が出ました。すぐに身支度して山を下り、再び貨車に乗りました。しかし、着いた所はチタの町、そして収容所でした。また「ダモイ、ダモイ」と言われ、ソ連国にだまされました。ここで、また一年間の重労働が始まるのでした。

あの寒さ、栄養失調と重労働で死んだ同志のご冥福をつつしんで祈り、この章を終わります。

【執筆者の紹介】

生年月日 昭和二年七月二十八日

軍 歴

昭和十九年四月十日 県立花巻中学校在学中、中部

浜松飛行隊に入る

十月一日 九七部隊高野中隊に配属される

(満州国東安)

昭和二十年十月 ソ連軍により武装解除される

十二月 黒龍江を渡りソ連国に入る

昭和二十一年一月 バイカル湖を横断して囚人の収

容所に入る

昭和二十二年十月 チタ地区に移る

昭和二十三年十月 ウラジオストックに着く

十二月一日 舞鶴港に着く

平成三年七月 和菓子職人を退職

現在は、月曜日はボランティアとして働き、火、土

曜日はアルバイトとして働く。

(神奈川県 相原 貞雄)

シベリア抑留記

神奈川県 石井 勇

私が抑留されたのは昭和二十年十月下旬でした。八月十二、十六日、中国東北部牡丹江郊外の愛河でロシア軍戦車部隊と交戦、敗北の色濃く、十六日夜陰に乗じて松花江にかかる橋梁を爆破して脱出し、二カ月有余の逃避行に移りました。終戦情報も知らず、十五日以降もロシア軍は攻撃の手をゆるめなかったのです。生命保証度ゼロの逃避行が三年間の抑留生活と共に生涯忘れられない事実となっています。あれもこれも記述したいのですが、取りあえず要点だけをかいつまんで筆記させていただきます。

南への逃避行

八月十七日、正午頃、小高い丘の中腹で突然戦闘機

の機銃掃射を受けた。「危ない！ 身を伏せろ！」誰かが叫んだ。反射的に身をかわした。目の前で二、三人がばたばたと倒れたのを目撃した。九月初め頃には我が分隊だけの単独行動になってしまった。十一、二人だったろうか。いつの間にやら、背囊の中味は鍋釜に化けていた。一時は満人部落からかき集めた食糧で間に合っていたが、次第に警戒が厳しくなりそれも出来なくなってしまう。手榴弾を使って川鱒も食べ、野豚も食った。日がたつにつれてそれも駄目になった。自警団の襲撃も何回か受けたが、幸い犠牲者は出なかった。ただ、落伍者が半数以上出たのが残念だった。十月半ば過ぎには山肌に白いものが混じって見えるようになってきた。固いトウモロコシばかり生かじりしてきたせいか腹をこわしてしまった。そうでないまでも飢えと寒さで衰弱し切っていたのだ。

とうとう近くの部落に投降した。このときほど国境を越えた人の情が身に沁みたことはなかった。屯長宅で手厚いもてなしを受けた。高粱酒もふるまって貰った。散髪もしてくれた。余程好日派だったんだろう。